

## (8) 総合研究 (卒業課題) [4年]

### チームテーマと指導教員一覧 (A・B共通)

チームテーマ番号・チームテーマ		担当者 (☆はコーディネーター) および指導可能テーマの一例	
1	適応行動の認知的・身体的メカニズム	加藤 健二 ☆	日常行動の認知心理学的分析 (食行動、空間行動など)
		櫻井 研三	視覚科学、視覚を中心とした知覚心理学
		千葉 智則	運動・スポーツ生理学 (トレーニング、高温環境、身体組成)
2	社会的行動と適応	金井 嘉宏 ☆	行動科学と認知科学に基づく臨床心理学
		福野 光輝	ヒューリスティックとバイアスの社会心理学
		堀毛 裕子	心身の健康と適応 (ストレス、対人関係、ポジティブなパーソナリティ特性など)
3	日本社会の変化とライフスタイル	小林 裕 ☆	組織と人間 (人的資源管理、リーダーシップ、職務態度など)
		神林 博史	日本社会における不平等 (職業、学歴、ジェンダー、家族など)
4	学びの文化	黒須 憲 ☆	運動文化としてのスポーツ・武道 — 運動会からオリンピックまで—
		水谷 修	生涯の学びと遊び—支援システム・学校と地域の協働・まちづくり
5	さまざまな人間の成長と支援	泉山 靖人 ☆	学校教育と生涯学習に関わる社会制度、学びの情報基盤
		平野 幹雄	臨床発達学 (発達障害児、震災後の気になる子の理解と心理的な支援、特別支援教育)
		清水 貴裕	教育臨床、学校カウンセリング、教育相談
		坪田 益美	社会系教科の教育・カリキュラム・内容論、学校教育、市民社会論
6	変わりゆく社会の家族と教育	片瀬 一男 ☆	教育と文化をめぐる調査データの計量分析
		仙田 幸子	現代日本社会における家族・人口・就業
7	人間とスポーツ	岡崎 勘造 ☆	運動、食事、睡眠の生活習慣に関する調査研究
		坂本 譲	運動・ストレス・生活習慣と健康、免疫 (運動免疫学、健康科学的探求)
8	文化のしくみと解析	信太 光郎 ☆	近・現代の哲学思想、生命、技術、言葉、芸術をめぐる問い
		津上 誠	家族、性、衣食住、交換、世界観等に関する異文化の内省的考察
		宮本 直規	ドキュメンタリー映画、フランス語
		文 景楠	西洋古代哲学史、英米圏の現代哲学 (言語哲学、存在論、行為論など)
9	中韓の言語文化	松谷 基和 ☆	韓国・朝鮮の歴史と政治、朝鮮半島をめぐる国際関係
		金 亨貞	韓国語学・韓日対照言語学 (統語論及び意味論)、韓国朝鮮語教育論
		金 永昊	日韓比較文学、韓国文化論
		塚本 信也	中国文化論 (文学、語学、歴史、神話、芸能など)
		楊 世英	中国語学および日中両国における社会構造変化
10	日本の言語文化	佐藤 真紀 ☆	日本語教育、バイリンガル教育、多言語多文化共生、実践研究
		原 貴子	日本文学・日本文化
		(日本語学新任教員)	
11	英語圏の言語文化	秋葉 勉 ☆	アメリカ文学・文化
		アンドリュース デール	Folklore (民俗学)
		井上 正子	フェミニズム、ジェンダー、クィア批評 (文学や映画等の表象文化における性、身体、装い、境界、暴力等)
		ワトソン スコット	Translation studies, Racism in America, American culture
12	ヨーロッパの言語文化	門間 俊明 ☆	ドイツの言語と文化、ポップカルチャー
		佐伯 啓	レトリックと言語教育、ドイツの言語と文化、引用句研究
		フリック ウルリッヒ	歴史学、東アジアとドイツの文化とその比較
		森 美智子	視覚芸術 (絵画・彫刻・建築など) の分析と解釈、歴史と芸術文化の諸問題
		山崎 冬太	文学、フランス文化、表象文化 (映画、写真、広告)、精神分析
13	表現と文化	下館 和巳 ☆	演劇 (舞台製作・俳優修行・戯曲研究)、英国文化、ダンテ
		吉用 宣二	ドイツ文化、文学、建築、写真、都市、旅

チームテーマ番号・チームテーマ		担当者（☆はコーディネーター）および指導可能テーマの一例	
14	言語の分析と応用	渡部友子	☆ 実例から探る言葉の使われ方（英語または日本語）、英語教育
		岸浩介	英語や日本語を対象とした統語論および意味論
		高橋直彦	日・英語の音形（＝発音）の背後に潜む法則性を突き止める
		坂内昌徳	第二言語習得研究、英語教育
15	情報科学の基礎数学	佐藤篤	☆ 離散的な幾何学とその応用
		小林善司	数え上げ組み合わせ論入門
		石田弘隆	代数多様体と関連する幾何学
16	情報科学と現象の数理解	星野真樹	☆ フーリエ解析とその応用
		岩田友紀子	確率論・実解析・関数解析など解析学全般
17	情報科学と生命のメカニズム	牧野悌也	☆ 生き物の情報処理メカニズムの解明とモデル化
		土原和子	生物における情報の受容機構の解明・ゲノム情報解析
		松尾行雄	音響情報処理とその応用に関する研究
18	コンピュータシステムの構築	武田敦志	☆ 生活を支える情報処理システムの設計と開発
		菅原研	うごくものをみる、かんがえる、つくる
19	情報技術を利用した教育システム	村上弘志	☆ 天文学に関連した教育用・研究用アプリケーションの開発
		松本章代	知的でユニークな教育システムの開発・運用・評価
20	人の暮らしと自然環境	平吹喜彦	☆ みどりと景観から環境保全、森林文化、地域づくりを考える
		柳澤英明	地域づくりから災害に強いまちづくりを考える
		松本秀明	地域に広がる地形の把握とそこに潜在する災害リスクの掘り起こし
21	地域の経済と文化	岩動志乃夫	☆ 地域資源を活用した産業振興と地域形成に関する地理的研究
		柳井雅也	少子高齢化社会における地域経済の活性化について
22	地域コミュニティの創造力と回復力	金菱清	☆ 震災における地域コミュニティの再編成とそのあり方
		佐久間政広	農山漁村の地域社会における諸問題
23	地域のまとまりとゆらぎ	高野岳彦	☆ 地方都市・農山漁村の生業・産業の変容と地域の持続可能性
		遠藤尚	変動する社会経済状況下における地域の生活と文化の諸問題
24	少子・高齢社会と福祉	菅原真枝	☆ 高齢者福祉や障害者福祉を中心とする事例分析と社会学理論の検討
		大澤史伸	NPOについて考える
		増子正	地域が抱える福祉課題の分析と、課題解決のシステムを考える
25	健康とスポーツの科学	天野和彦	☆ 地域スポーツをマネジメントから考察する
		松原悟	スポーツ科学の観点から地域スポーツ活動について研究する
26	情報技術と社会	鈴木努	☆ 社会ネットワーク論、社会運動論
		伊藤則之	教育や業務を支援するアプリケーションの開発および実用化
		乙藤岳志	異CPU/異OSでのセキュアネットワーク環境の構築
		杉浦茂樹	利用者中心のサーバーの企画・設計・構築・運用
27	情報活用による地域社会の課題解決	坂本泰伸	☆ インターネットを活用したソフトウェアシステムの設計と開発
		和田正春	市民力を活かす地域マネジメントの構想と実践の研究

# チームテーマの解題と担当教員

注意：各解題の下欄に掲載した推奨論文は、テーマ解題を作成した教員ら（☆は、コーディネーター）が、それぞれのテーマに関連して皆さんの参考になると評価した先輩の論文の一部です。論文を読みたい場合は、各教員の研究室を訪ねてみてください。末尾の数字は卒業年度を表します。

## 1. 適応行動の認知的・身体的メカニズム

加藤 健二☆ 櫻井 研三 千葉 智則

人間は、刻々と変化する環境の中で適応的に活動するための極めて巧妙なしくみを備えており、それらを用いてより快適に生活しようとする志向性を持っている。

「適応行動の認知的・身体的メカニズム」グループでは、こうした適応行動を支えている認知的あるいは身体的機序を、心理学実験や運動生理学的実験により明らかにすることを目指す。以下に各教員の主な指導内容を紹介する。

加藤：

同じものを食べても、誰とどこで食べるかによって感じられる「おいしさ」が異なるのはなぜか？高カロリー食品は食べないほうがいいと思っても食べてしまうのは何故？道に迷いやすい人にはどのような特徴があるのか？こうしたありふれた日常行動の背後に、どのような認知的メカニズムが隠れているのかを心理学実験を通して解明することを目指す。

櫻井：

人間は、外界の3次元構造と自分自身の動的状態を、視覚・聴覚・触覚・前庭覚などの複数の感覚で同時にとらえている。個々の感覚にもとづく外界知覚の機序は明らかになりつつあるが、単一の外界事象が引き起こす複数の異種感覚情報がどのように統合されるのかという問題は、まだ解明されていない。ここでは複数の感覚情報が統合されて自己と外界の安定した知覚が成立する機序を、心理物理学的手法で解明することを目指す。

千葉：

ヒトは、高温多湿や低酸素濃度といった外部環境の変化に対して恒常性を維持する高い能力を持っている。しかし、そのような外部環境の変化を伴うなかで運動を遂行するためには、恒常性機構と代謝機構に競合が生じていると考えられる。それらの競合が運動パフォーマンスにどのような影響を及ぼすか運動生理学的実験から明らかにし、ヒトが特殊な環境下で運動を行った場合の機能的適応の解明を目指す。

## 推奨する総合研究論文

- 1 「飲料の色の適切性操作が味評定に及ぼす効果」(中村成美、2016)
- 2 「運動視差から知覚される奥行の方向を一義化する網膜外情報」(古川詩穂里、2015)
- 3 「ガム咀嚼が高強度間欠的運動における生理的、主観的影響」(中村圭吾、2017)

## 2. 社会的行動と適応

金井 嘉宏☆ 福野 光輝 堀毛 裕子

人間は社会的関係の中で生活しており、その社会的行動の仕組みや発達・形成は、個人のパーソナリティや自己意識、心身の健康や適応にもきわめて密接に関連している。このチームでは、3名の教員が心理学の立場から人間の社会的行動の構成や形成の問題を扱い、個人の心身の健康や適応などの問題についても、社会的行動の視点を含めながら検討する。

堀毛は、心身の疾患、ストレスや対人関係などの心理的問題や、ポジティブなパーソナリティ特性について、臨床・健康・パーソナリティ心理学などの幅広い視点から検討する。

福野は、対人葛藤や交渉、公正感をはじめとして、広く対人場面における認知や行動について、社会心理学の理論と方法を用いて検討する。

金井は、社会生活の中で生じる不安や抑うつ、ストレスなどに関わる問題について、臨床心理学、特に認知行動療法の立場から検討する。

総合研究は、教員チームによる指導というだけでなく、学生自身の大学での学修を総合するという意味も持つ。これまでの学修をもとに、文献検索と先行研究の検討を経て研究課題を設定し、実験や調査による実証的な分析を行って論文にまとめる作業は、厳しいものではあっても、人間への考察を深め、今後に必要な力を育むための機会となるだろう。

### 推奨論文：

- 1 「ABCDEモデルの効果の検討—小学生を対象とした認知的介入—」  
(湊麻由佳、平成25年度・学部長賞受賞)
- 2 「『類は友を呼ぶ』は本当か：同族嫌悪を例とした類似性魅力仮説再考」  
(鈴木幸乃、平成29年度・優秀論文賞受賞)
- 3 「社交不安者に対する注意訓練とマインドフルネス瞑想および慈悲の瞑想の効果」  
(小野遥加、平成29年度・学科長賞受賞)

### 3. 日本社会の変化とライフスタイル

小林 裕☆ 神林 博史

日本社会は科学技術の発達、人口減少とその年齢構成の変化、および経済のグローバル化の進展に伴って、社会組織から個人の日常生活に至るまで急激に変動してきている。こうした変化は、人々の行動や意識として表れるライフスタイルに大きな変化を及ぼしてきた。「日本社会の変化とライフスタイル」チームは、このような社会変動とライフスタイルの関わりを多角的に検討することを目指す。

小林は、現代社会における「組織と人間」の問題に心理学的視点からアプローチする。企業・学校などの組織がそのメンバーに及ぼす影響、逆にメンバーの相互作用が組織の成果をもたらす過程に注目する。

神林は、現代日本社会におけるさまざまな不平等に注目する。具体的には、収入、ライフスタイル、職業、学歴、ジェンダー等の不平等の実態とその形成メカニズムが中心的な問題関心となる。

#### 参考にするべき総合研究

「大学教員の感情労働が精神的健康に与える影響

—パーソナリティ特性の調整効果に着目して—」（中村茉莉、2014）

「ひとり親世帯の貧困：母子世帯と父子世帯の違いに注目した分析」（伊勢彩佳、2014）

### 4. 学びの文化

黒須 憲☆ 水谷 修

私たちの社会では学びの文化を発展させてきた。今日まで継承されてきた伝統芸能・芸術や武道などのけいこごとはその一つである。一方、生涯学習の理念の普及とともに、学びの文化に変化が生じている。様々な活動が学びの対象とされ、生きがいや他者とのコミュニケーションが学びの目的となった。また、まちづくりや地域づくりのための学びや、キャリア開発のための学び直しの文化も育ちつつある。学びの形態も、先生から生徒への一方向的なものから、学び合いが重視されるようになり、近代以降教えの文化を育んできた学校も、学びを重視した文化を創造しつつある。

このように、学びの文化には不易と流行がある。このグループでは、学習活動や芸術、芸能、趣味、体育・スポーツ、ボランティア活動など、様々な活動の中で育まれてきた学びの文化に焦点をあて、それがどのような変化を遂げてきたのか、変化の社会的な背景は何か、現代社会において学びの文化がどのような役割を果たしているのか、あるいは、学びの文化を育てるにはどのような仕組みや取組が必要かなどについて検討する。

水谷は、生涯学習の立場から、生涯各期の学びと遊びに関心があり、「支援」という視点からこれらに関する諸問題について検討している。また、自治体の計画・施策づくりや青少年対象の実践活動に参加・参画している。総合研究では、自分の興味・関心に沿って自由にテーマを設定してよいが、第一にテーマに取り組む熱意、第二にフットワークのよさ、第三に協働する力を備えていることが、参加の条件となる。

黒須は、体育方法学の立場から、スポーツを身体的技術学や生理学としではなく、社会を構成している運動文化としてとらえ、スポーツがうまくなるという事は一つの文化を経験し新しい文化を創造する事である。という事を理解する。そしてそれらが持つ社会的意義や特徴、諸問題について考察を行う。

スポーツの語源は気張らしや遊ぶ事で人生を豊かにする物である。今日の近代スポーツは、過剰な競争原理の反復の末に「勝利至上主義」「巨大イベント化」「メディア主導化」等々の様々な問題を抱え、本来の意義を失い臨界点に達しているといわれている。

## 推奨論文

水谷

「防災・減災の日常化を図るための地域防災学習の考察」(長谷川光、2017年度)

「大学生における職業モデルと職業観の関連」(熊谷奈央、2015年度)

「『自己物語』語りと生きがいの関連」(田村紗希、2009年度)

黒須

「北辰一刀流及び千葉周作が現代剣道に与えた影響」(千葉楓、2017年度)

「オリンピック・レガシーに関する一考察」(藤井飛佳、2016年度)

「アジアの子どもにおける体格・体力と運動習慣に関する一考察」(早坂歩、2015年度)

## 5. さまざまな人間の成長と支援

泉山 靖人☆ 平野 幹雄 清水 貴裕 坪田 益美

「子どもが大人になる」「人が何かを学ぶ」というプロセスは社会の中でどのような意味を持ち、またそのプロセスの中では人にどのような変化が起きているのであろうか。

私たちは、家庭においては親や兄弟姉妹と、学校においては教師や友人と、社会においては職場や地域関係など多様な人間関係を営み、その影響を受けながら心身を発達させていく。私たちを取り巻く現代社会は、急速に国際化・情報化・高齢化を進めている。その影響は、子供の具体的な成長の場である家庭や学校、地域社会にも及び、例えば携帯端末などの新しいメディアとの付き合い方、経済格差と学力格差、コミュニケーション不全、多様な人びとが含まれるコミュニティの形成、小学校における外国語活動の導入、国際レベルでの学力観の標準化、アクティブラーニングなどの学びの手法の転換等、多様な課題に向き合える力量の形成など、新たな諸課題が生ずるようになった。

総合研究では、人間の成長とその支援にかかわる諸課題、そして私たちの成長を支える場であ

る家庭、学校、社会にかかわる諸課題といった幅広い領域から、学生各自がこれまで学習してきたことを基に具体的な研究課題を設定する。関心領域の文献検索、先行研究の検討、文献資料の読解を通して、あるいはフィールドワークや調査・実験などによって、研究を深め論文にまとめていく。3回を予定している総合研究発表会等の交流の機会も生かしてほしい。実りある研究成果が数多く出てくることを期待したい。

### 推奨論文

- 「外向型志向の教育が内向型人間にストレスを与える可能性」(佐々木輝也、2017)
- 「児童期のメディア利用と青年期の知的好奇心の関係」(深田知寛、2017)
- 「テレビゲーム遊びとワーキングメモリの関係」(藤本武、2017)
- 「スクールカーストの存在と過ごしやすい環境づくりにおける教師の役割  
—生徒に対する教師の働きかけに注目して—」(太田遥香、2017)
- 「偏見的視点を形成する教育—同性愛者に対する偏見を取り上げて」(武田悠飛、2016)
- 「子どもの貧困—負の連鎖を断ち切るために」(丹野早紀、2016)
- 「シティズンシップ育成におけるイェナプラン教育の意義  
—アクティブラーニングの視点から」(坂本麻悠子、2015)
- 「韓国におけるシティズンシップ教育」(中濱暢美、2014)
- 「子供の規範意識と異世代間交流の関係性—大都市とへき地の視点から」(高橋有道、2014)
- 「女性の社会進出と性別役割分業の相関—日本人の潜在意識を手がかりに」(高橋愛美、2013)

## 6. 変わりゆく社会の家族と教育

片瀬 一男☆ 仙田 幸子

今日、家族や学校は変わりつつある。家族に関して言えば、晩婚化や少子化、女性の社会進出、性別役割分業の変化などは、日本の近代家族に揺らぎをもたらしている。学校に関して言えば、いじめや学力低下さらには学力格差の問題などが注目されている。家族も学校も人間形成の根幹に関わる機関であるが、そこにグローバル化や社会格差、情報化などの流れが押し寄せ、家族や学校のあり方が変わってきているのである。

このグループでは、こうした家族や学校におけるさまざまな問題について扱い、個人が生きている社会的・文化的要因との関係のうちどのような変化が起こっているのかについて、人間形成や社会化という視点からとらえようとする視点を共有する。担当教員の専門性からいえば、具体的には、家族や教育をめぐる意識や行動についての社会学的検討が中心的なものとなる。

総合研究においては、学生各自が、家族や学校教育などのトピックにかかわる研究課題を設定し、それについて調査や文献研究を行う。文献検索や先行研究の検討から始めて各自の研究課題を設定し、実証データを分析・検討したり、資料や文献を詳細に検討したりするという一連の作業を通して、人間形成の問題について検討を加え、変わりゆく現代社会における家族と教育の問題について考察を深める機会としていきたい。

## 推奨論文

「ポスト近代社会において若者に求められる能力

—内閣府『人間力戦略研究会報告書』の内容分析」(鈴木光、2016年)

「教育する家族の階層分化：教育する可能性と必要性の間で」(三上和歌子、2015年度)

「夫の家事参加は進展しているか」(渡邊由香、2017年度)

「マスメディアが提示するジェンダーマイノリティのイメージの変遷

—女性週刊誌の記事タイトルを例として—」(菅彩花、2014年度)

## 7. 人間とスポーツ

岡崎 勘造☆ 坂本 譲

「人間とスポーツ」というテーマにおけるスポーツとは、単に競技スポーツを意味するのではなく、日常的な運動を含むヒトの活動（身体活動）全般を意味します。我々のチームでは、その身体活動全般を研究対象とし、例えば、身体活動に含まれるスポーツ活動について何らかの手法（測定や調査）を用いてデータ化し、データの特徴やデータ同士の関連性を明らかにすることを目指します。結果（データ）の背後に潜む要因（結果が得られた原因）について他のデータとの関連性から考察することもあれば、文献資料等から考察することもあります。具体的な研究テーマとアプローチの仕方については次の通りです。1）ボールゲーム分析、スポーツ動作解析的研究、2）身体活動にまつわる調査研究、3）体力・運動能力測定、4）運動を含む健康行動に関する生活習慣調査、5）パフォーマンステスト及び評価法開発（フィールドテスト、質問紙テスト）、6）運動や生活習慣、ストレスが免疫機能やその他の生体機能に及ぼす影響に関する検討（実験、調査研究）。

したがって、これらのテーマに取り組むためには、ヒトの行動をデータ化する能力、データや文献資料を収集する能力、データを解析する能力、データを解釈する能力を身につけることが必要となります。

## 推奨論文

「被災状況の異なる児童の強度別身体活動及びQOLの比較と体力との関連」(熊谷泰輝、2015)

「競泳におけるクーリングダウンが血中乳酸濃度に及ぼす影響」(松永裕樹、2016)

「音楽によるリラクゼーションが少林寺拳法組演武時のストレス免疫指標の変動に及ぼす影響」

(百井香穂、2017)

「生活習慣改善支援事業が児童生徒の心身に及ぼす影響:国立花山青少年自然の家による縦断研究」

(佐藤沙恵、2017)

## 8. 文化のしくみと解析

信太 光郎☆ 津上 誠 宮本 直規 文 景楠

「文化」とは何だろうか。きわめて多様な意味で用いられる言葉である。一般的には、人間の生活様式の全体、あるいは、人間が作り上げてきた有形・無形の成果の総体が「文化」と呼ばれる。

よく似た意味の「文明」という言葉と比べてみよう。文明が「四大文明」「機械文明」「物質文明」など、人間の知識や技術が向上することにより便利になった人間生活のあり方を指すのに対し、文化は「縄文文化」「日本文化」「東西文化」など、地域や時代に根ざした形で人間精神が生み出したものの全体を意味する、と言える。

私たちが取り上げようとするのは、後者の「文化」である。ある歴史家によれば、文化には、娯楽・ファッション・ライフスタイル等、衣食住を中心とする「ソフトな文化」と、言語・宗教・道徳などの「ハードな文化」の、二つの側面が存在する。ソフトな文化は産業化や情報化によって大きく変わっていくのに対し、ハードな文化は時代が移っても比較的ゆるやかにしか変わらない。

ソフトな文化であれハードな文化であれ、それがどのようにして生まれるのか。また、文化が人々に受容され広まる、あるいは逆に、それが放棄され廃れるのは、どのようにしてか。こうした文化のしくみについて考察し、それを論文という形にまとめ上げること、これが本チームの課題である。

### 推薦論文

「在日フィリピン人妻の研究」(昆野綾果・三好里奈・早坂美咲・吉田雅礼、2014)

「女性コスプレイヤーはなぜコスプレするのか」(佐藤瑠奈、2015)

「人工能によって変化する人間社会の仕事」(畠山成美、2016)

「ホームドラマの変貌と家族観の変化」(鈴木菜乃子、2017)

## 9. 中韓の言語文化

松谷 基和☆ 金 亨貞 金 永昊 塚本 信也 楊 世英

中国は、西方の異文化の影響や北辺の遊牧民族の圧迫を絶えず受けながら、有史以来独自の文明圏を形成し、持続的な展開を遂げてきた。韓国朝鮮及び日本は、その強い影響下にありながらも固有の文化を育んできた。こうした中国を核とする東アジア文明圏は、漢字、仏教などを共通の基盤として、伝統文化を形成してきた。しかしその伝統ないし体制は、西欧近代の成立によって変更を余儀なくされ、困難な近代化の過程を強いられることになる。

本チームでは、伝統のみならず、近代以降、さらに劇的な変化をとげる現在の東アジア情勢をも等しく視野に入れながら、言語や文化、思想、芸術から風俗や生活習慣にいたる多様な文化の諸相、また経済発展や環境問題、国際協力など今日的なグローバルな諸課題を考察の対象として取り上げる。具体例を挙げれば、中国語や韓国語文化圏における服飾や文化の変遷や言語上のジェンダー差別表現などに着目し、その歴史的背景を考察したり、あるいは少子高齢化社会のもたらす社会・経済的インパクトを地域間の比較も視野に入れつつ分析したりすることが可能であろう。

このようにアプローチの対象は、それが研究課題として成り立つ限り、それぞれの問題関心の所在に応じて自由に選択されてよい。また文献資料に限らず画像資料の解説、統計資料の活用なども有効な方途となろう。東アジアを対象とする個別具体的な課題の探求を通して、文化や異文化交流の深層に触れ、各国各民族の相互の相対化と共生の可能性を探求することこそが、本チームの最終的な目標である。

### 推奨論文

- ・「農民工から見た改革・開放以来の中国農村社会の変動」(藤野美恵、2012年)
- ・「中国における宮沢賢治童話の受容—「雪渡り」を中心に—」(太田恵、2015年)
- ・「韓国語の形容詞派生接尾辞についての考察—-스럽다」「-롭다」「-답다」を中心に—」  
(井手友紀子、韓国語で執筆、2016年)
- ・「教科書にみる竹島に関する記述研究」(渡辺肖、2018年)

## 10. 日本の言語文化

佐藤 真紀☆ 原 貴子（日本語学新任教員）

日本語や日本文化は、日本で生まれ育った人にとって、日常的で当たり前のものかもしれませんが、本グループでは、その当たり前だと思っていた日本のことばや文化の仕組み・実態に着目し、自分なりの問いを立て、深く掘り下げていくことを目指します。具体的には「日本語学」「日本語教育学」「日本文学」の領域の研究を行います。

ことばに目を向けるのが、「日本語学」や「日本語教育学」です。日本語学は、日本語そのものを分析対象とし、日本語の法則を追求します。例えば、語や文の構造・談話の構成・音声の特徴・言葉の意味・実際の言語使用・日本語の変化など、日本語のメカニズムを明らかにしていく研究が可能です。後者の日本語教育学では、日本語が母語ではない人に日本語を教える際に起こる様々な現象を取り上げます。例えば、言語学習の過程・日本語学習者の言語使用・学習者や教師の意識等の実態を明らかにする研究、効果的な教授法や多言語多文化共生のあり方を追求する研究などが可能です。

また、文化に目を向けると、日本文化が集約されているものの一つとして「日本文学」があります。日本文学の研究では、語りのあり方・読者という存在・本文の生成過程などを明らかにしていきます。さらには、映画・漫画・アニメといった媒体との影響関係なども追求することができます。日本の文学作品に触れ、深く理解し、考察していくことで日本を知ることにつながります。

当たり前だったものに対して疑問を持ち、自らの足もとである日本のことば・文化を考察することが、異文化理解への出発点になるでしょう。

### 推奨論文

「ベトナム語母語話者による日本語発音協働学習の試み」（齋藤ゆみ乃、2018）

「非複合語の動詞・目的語間の重複表現—『歌を歌う』を例に」（千葉周平、2018）

「日本社会に住む韓国人のライフストーリー：ケーススタディーから探る多文化共生社会」

（大場悠香、2016）

## 11. 英語圏の文化と歴史

秋葉 勉☆ アンドリュース デール 井上 正子 ワトソン スコット

文化は人間が生きる中で生み出した形である。それは特に言語によって媒介されるが、日常的には人間の習慣（衣食住）、そして昇華された形で芸術の中に示される。その文化の様々な形態を読解・理解することは、人間を理解することである。本グループは英米圏の文化をテーマとしている。英語圏は歴史文化的にほぼ同一のルーツを持っているので、文化の伝播を考察することも可能であるが、それぞれの個別の文化事象を研究することもできる。具体的には、文学（詩、

童話、小説。あるいは西洋全体の運動であったロマン主義など)、民族学、写真や映画、絵画、庭園、建築、都市などの視覚的芸術・オブジェ、アメリカの20世紀の文学・芸術運動などが挙げられる。私たちは日本人であるので、日本文化から見た比較文化的な視点が前提となるが、そもそも文化は単独では存在しない。そこに、どの文化の中にも、グローバル世界における多元的価値が姿を現すだろう。

#### 推奨論文

「日本語オノマトペの理想的ドイツ語訳—マンガ翻訳を通して—」(熊谷美帆、2013)

「グリム童話における二つの女性像」(高橋千佳、2014)

「グリム童話の『森』の二つの世界—異世界と日常の世界—」(徳田菜美、2015)

## 12. ヨーロッパの言語文化

門間 俊明☆ 佐伯 啓 フリック ウルリッヒ 森 美智子 山崎 冬太

ヨーロッパの文化は、言語、思想、文学から、芸術、映画、ファッション、さらにはスポーツや車にいたるまで、いろいろな形で私たちの生活の中に入り込んでいる。なかでもドイツとフランスの文化は、高等教育機関における言語教育の伝統とも深く結びついて、わが国の学問や文化に大きな影響を与え続けてきた。

「ヨーロッパの言語と文化」をテーマとするこのグループでは、新しいヨーロッパを目指すEU(欧州連合)の中で、政治経済的にも文化的にも特に重要な役割を担っている、ドイツおよびフランスの言語と文化をおもな研究対象とする。「言語」と「文化」という二つの核を視点に据えることで、ドイツ語圏、フランス語圏のあらゆる文化事象が考察の対象となる。また、ひろくヨーロッパの芸術文化もそれに含まれる。

具体的なアプローチとしては、独仏それぞれの文化論的・文化史的考察、文学、美術の分野での作家や作品研究、日独仏の比較文化、言語表現分析などさまざまな問題設定が考えられよう。さらには、歴史的、地理的な関わりも視野に入れば、ヨーロッパという大きな枠組みの中でこれらの問題を捉えなおすことも可能だろう。

#### 推奨論文

「『グリム童話集』の中で森はどのような役割を担っているのか」(佐藤 光、2011)

The Reason for the Popularity of Manga in France (小竹真菜実、2011)

Problems of Language and Culture in the Translation of Japanese Manga (山寺しおり、2011)

「ピエール＝オーギュスト・ルノアールの裸婦像」(福士茉莉、2012) 優秀論文

「世界2大スポーツブランドの戦い」(城戸亮兵、2016)

「Kipferlの文化史—ドイツの伝統的焼き菓子のフォルムとその意味の変遷—」

(宍戸なな、2017)

## 13. 表現と文化

下館 和巳☆ 吉用 宣二

「文化」の英語“culture”の“cult”には語源的に「生成」という意味があります。ですから、“agri”つまり「土」と結びついた“culture”は“agriculture”つまり「農業」になるわけです。「文化」という言葉は、歴史的に「創造する行為」と深い関りを持っています。このグループの特色は、創造された結果として「自然を写す鏡」となっている芸術様式の中でも、とりわけ、映画・演劇・文学といったジャンルに焦点をあてていますから、創造的要素の濃さにあります。具体的には、映画・舞台芸術を成り立たせる重要な要素としての俳優、観客、脚本の理論的考察、或いは舞台製作といった実践的創造を行いながら、ヴィジョンと言語を軸とした芸術と文化の相関関係を極めていきます。

### 推奨論文

『『じゃじゃ馬馴らし』舞台製作』（グループ製作、2015）

## 14. 言語の分析と応用

渡部 友子☆ 岸 浩介 高橋 直彦 坂内 昌徳

本グループが扱う主要な領域は言語の分析と応用、つまり言葉に対してどのような分析が可能か、コミュニケーションの道具としてどのように働いているのか、などを調べることです。

言語は、音声と意味の2つの側面を持ち、また、その構造も語・文・談話といったレベルの違いが存在します。どのような側面から研究するかによって音声学・形態論・統語論・意味論などの分野に分かれます。また、発話の状況を含めて意味を考えると、語用論と呼ばれる分野があります。最も広い意味で文法を考えると、「文法」は言語の構造をすべて含みます。

言語の構造は複雑ですから、いろいろな見方や分析が可能です。それぞれの分野で提案されている理論はひとつとは限りませんが、どのような理論であれ、総合研究では、それに何か新しい見方や観察、証拠などを付け加えることが目標です。

本グループでは、第二言語習得や教材作成など、学び方や教え方の研究も対象として含みます。たとえば、特定の言語の音声・語・文の構造の分析をもとにした、効果的な学習法や教育法についての研究等です。どのような側面から言語について研究する場合も、先人の積み上げたものに小さい1個を加えるという謙虚な気持ちで研究に臨んでほしいと思います。

### 推奨論文

“The Syntactic and Semantic Reconsideration of *That*-Relative Clause”（千坂裕美、2007）

「終助詞『よ』と『ね』の統一的な意味・機能」（阿部真衣、2010）

「ひな形方式に基づく英語の文構造再考」(佐藤怜美・小林維奈、2012)

「同格名詞節を導く接続詞 that の省略に関する再考：英語母語話者の直観的判断を通して」  
(大和田拓弥、2015)

「継続アスペクトの日英韓比較—日本語母語話者の英語・韓国語習得の観点から—」  
(千葉絵里子、2017)

## 15. 情報科学の基礎数学

佐藤 篤☆ 小林 善司 石田 弘隆

情報科学に関する技術の進歩とその応用の可能性は、コンピュータの能力と共に日々進化している。その基礎として、また今後のさらなる発展を支えていくものとして、数学および数学的な思考方法がある。古典的な代数学、幾何学、解析学、集合論、数理論理学といったものにとどまらず、グラフ理論や暗号理論・符号理論から数値解析に至るまで、数学と情報科学との結びつきは深いものがあり、それらを理解することは情報科学を理論の面から進化させていく上で欠かすことができない。

このテーマでは、情報科学の基礎としての数学を基本的な立場から学ぶ。取り上げるのは「数え上げ組合せ論」「代数幾何学」「離散的な幾何学」といったトピックや、それらの応用である。また、コンピュータを利用して数学的な抽象概念をコンピュータグラフィックスの形で可視化することも目指す。さらに、数学教育の現状についての検討も積極的に行い、どのような教育が求められているかについて考えたい。

教員免許状(中学校・高等学校数学)の取得と共に実際に教職に就くことを目指す上で、数学的な知識を身につけることと、人に伝える能力を身につけることは必須条件である。卒業課題の研究においては、それらのことも十分に考慮される。

### 推奨論文

「3次方程式の解法について」(小林由紀子、2004)

「パスカルの定理とその応用」(吉田雄樹、2016)

「多角形と多面体の Ehrhart 理論」(小菅寛華、2017)

「ブロック・デザインの構成について」(茂木智花、2017)

## 16. 情報科学と現象の数理

星野 真樹☆ 岩田 友紀子

自然科学においては、どの分野に限らず「どうなっているのだろう」「なぜだろう」という疑問を持つことが始めの一步です。この疑問を問題として表現し、さらに解決に至る有力な方法を提供するのが数理科学です。「情報科学と現象の数理」では、そのような数理科学の方法のおもしろさと有効性を学習します。学生が、解決の糸口となる基礎的な理論や技法を学び、自ら解決の道を切り開いていくことができるよう、教員は助言や指導を行います。

数理科学の方法の有効性を最も明瞭に示すのが数学です。われわれは、パズルや数学の基礎的な問題を通して、その力の根源に迫ります。また、自然界の現象が数理科学の言葉で表現され、理解できることも学びます。

課題の具体例として、次のようなものがあります。

### (1) 数学の基礎理論と応用

数学における様々な分野から興味ある話題を選び、基礎的な理論を習得し、その応用を試みる。教科書の輪読と討論を行い、理解を深める。

### (2) 数学の諸問題のコンピューターを用いた取り扱い

定理として得られた諸結果やその具体例等について、コンピューターによる可視化を試みる。また題材に応じて実際の現象を数学的に解釈し、Mathematicaなどの数式処理ソフトなどを用いて、そのシミュレーションについて考察する。

### 推奨論文

「コーホート解析を用いた人口動態の数理モデル」(大澤慶子、2012)

「染谷・シャノンのサンプリング定理」(佐藤健太、2015)

「正則関数の零点と代数学の基本定理」(大友陽介、2016)

「ケルマック-マッケンドリックの伝染病モデルに対する数学的考察」(櫻井大輔、2016)

「曲面の構造方程式とその可積分条件」(柴澤大夢、2017)

「フーリエ級数と等周問題」(小山清也、2018)

## 17. 情報科学と生命のメカニズム

牧野 悌也☆ 土原 和子 松尾 行雄

情報を「特定の機能を発現するシステムの状態・行動を決定するために必要なモノ」と定義する。そうすると、生命はその誕生と同時に「情報」を生みだし、その進化の過程で様々な形態の情報処理能力を発展させてきた、と捉えることができる。生命を理解することは、地球上で最も

長い歴史と優れた柔軟性を持つ「情報処理システム」を理解することに他ならない。本グループでは生命の情報処理のしくみについて、感覚受容（土原）、脳神経系（牧野）、計算アルゴリズム（松尾）を中心テーマとして研究をおこなう。

牧野：

生命現象には人の好奇心を駆り立てる本質的な面白さがあります。一方で、生命現象は大変複雑で、これを理解するには複雑な現象を簡単な形に整理する力が不可欠です。ここではヒトや動物の感覚情報処理・運動制御に関わる観察、実験、モデル化を行うことで、脳神経系が実世界で柔軟に機能する仕組みを解明するとともに、複雑な現象の本質を理解する力の獲得を目指します。

#### 推奨論文

「弓道における新しいトレーニング方法の開発」（大倉一矢、2014）

「スニッフィングの匂い情報表現へ及ぼす影響」（佐藤将太、2016）

「触覚における形識別」（新田大介、2018）

土原：

我々ヒトを含め生物は、日々環境から情報を受容しており、そのための感覚器を持っています。目で見て、匂いをかいで、触ってみて、味わう。これらはすべて感覚器で行っています。受容される物質の方は、情報伝達物質といいます。研究室では主に昆虫を使って、機械受容（気流、音等）、化学感覚（味覚、嗅覚等）受容の研究を、行動と分子サイド（遺伝子やタンパク質）からおこなっています。ここでは実際に生き物を使って、どのように情報伝達物質を認識しているのかを解明していくことを目的とします。

#### 推奨論文

「チョウの幼虫における音響刺激に対する行動」（伊藤伊知郎、2017）

松尾：

人は音を聞くことによって音声を認識し、音源がどこにあるかを知覚しています。また、イルカやコウモリは音を自ら出し、対象物から反射してきたエコーを聞くことによって、3次元空間を知覚しています。しかし、音がどのように処理され知覚されているかは、未だ解明されていません。ここでは心理物理実験や計算機を用いた解析により、これらのメカニズムを理解し、応用していくことを目的とします。

#### 推奨論文

「広指向特性超音波を用いた人検知」（星友也、2016）

「発声方法と歌真似が歌唱評価に与える影響」（村澤一実、2017）

「周波数帯域の時間反転が音声明瞭度に与える影響」（菅野絵莉、2018）

## 18. コンピュータシステムの構築

武田 敦志☆ 菅原 研

センサーやロボットなどの機器とコンピュータが連携して動作する新しい形のコンピュータシステムの構築を行います。このコンピュータシステムの構築を通じて、情報科学の基礎理論や情報システム開発技術の研究だけではなく、機械と人間が連携して作業する仕組みについても研究していきます。また、ソフトウェア開発や実験に関する技術を習得すると同時に、実験結果などの数値の解析方法や研究成果の発表方法（論文執筆やプレゼンテーションの方法）についても重点的に学習していきます。

具体的な研究テーマの例は以下の通りです。

- (1) 複数のコンピュータを連携動作させる情報システムの構築
- (2) センサーやカメラから得られた情報（画像など）を解析する技術の開発
- (3) 場所や状況に自動的に対応して動作する小型ロボット制御技術の開発
- (4) 生物の群れ行動の仕組みとその影響の研究

### 推奨論文

「利用者の位置に適した画像を表示する窓型映像表示システムに関する研究」（阿部祐輔、2013）

「多機種間連携を可能とする家電通信フレームワークに関する研究」（江口愛、2013）

「群れによる感情表現—個体数と感情の強さの関係について—」（西條蒼太、2014）

「トゲオオハリアリのリズム行動について」（浅野由香利、2014）

## 19. 情報技術を利用した教育システム

村上 弘志☆ 松本 章代

スマートフォンやタブレット端末の普及に加え、音声認識やAIなどソフト面での技術の進歩も目覚ましく、ICTを活用した新しい教育・学習環境の可能性がますます広がりつつあります。一方で、小学校でのプログラミング学習の必修化など社会的にプログラミング教材に対する関心が高まっており、これまで以上に情報技術を利用した教育・学習環境の開発に期待が寄せられています。

本研究グループでは、情報技術を利用した教育システムや教材の開発をテーマとします。プログラミング学習に限らず、天体観測や自然現象のデータ・シミュレーションの利用、語学学習など様々な分野において自由な発想で研究を進めていきます。システムや教材を完成させるだけにとどまらず、実際に児童・生徒・学生に使用してもらいその結果をもとに改良するなど実践的な手法も取り入れています。

研究に際しては、学生自身が主体的に取り組み、研究テーマの選択や問題点の明確化・解決を

図っていくことを重視します。

#### 推奨論文

- 「小学校高学年がプログラミングに興味を持つような教材の作成およびイベントの開催」  
(大崎翔太、2017年度)
- 「高校生を対象とした直感的に理解しやすい物理科目の教材アプリの作成」  
(河上友希、2017年度)
- 「惑星状星雲を題材とした高校生向け教材の改良」(横澤瑠唯、2017年度)
- 「限界等級評価システムの改良」(齊藤妃那、2016年度)

## 20. 人の暮らしと自然環境

平吹 喜彦☆ 柳澤 英明 松本 秀明

地域には「自然の恵み」に応じた暮らしがあり、多くの「かけがえのないもの・こと」が育まれてきた。一方、洪水や土石流、台風、津波などの「自然災害」は、しばしば人命や財産を奪い、住宅地や商工業地、農地、森林といった生活や文化の基盤にダメージを与えてきた。本チームでは「自然の恵みと災い」という二面性に着目し、「人と自然のよりよい関係」を考究・実践する。

この目的を達成するために、受講生ひとり一人は、①特定の地域を対象とし、②既存の文献を批判的に読み解きながら、③自らの手でフィールドからデータを収集し、④適切な手法を重ねて考察を深めてゆくことになる。調査・研究の進捗状況を報告し合うことはもちろん、他者の取り組みにも積極的に参加し、実体験に基づく知識と技能を身につけることが求められる。平吹は景観生態学・環境教育（ESD）の視点から、柳澤は地域防災・復興・活性化の視点から、松本は自然地理学・地形学の視点から、研究指導を行う。

#### 推奨論文

- 「仙台市新浜地区における「交流を促進する仕組み」づくり」(澤口文香、2018)
- 「津波を受けた海岸後背湿地における自律的な植生再生と微細地形」(菅原諄史、2018)
- 「災害経験を活かした地域づくりの実践的研究  
～気仙沼市本吉町における被災経験の風化と災害伝承～」(佐藤茉央、2018)
- 「地域住民参加型のワークショップを通じた水辺空間の活用方法について  
～名取市閑上を対象として～」(千葉 礼、2018)
- 「松島湾における2011年東北地方太平洋沖地震前後の砂浜変遷」(八幡恒輝、2018)
- 「七北田川流域に発達する河成段丘とその編年」(先家佑貴、2018)

## 21. 地域の経済と文化

<sup>いするぎ</sup>  
岩動 志乃夫☆ 柳井 雅也

今日の地域社会には多くの課題が山積しており、中でも経済的な課題は地域形成に大きな影響を及ぼす。課題となっている要因の特定および解決の提案につなげていくためには、問題を広い視野で構造的に捉え、地道で正確な調査・分析を空間的視点から行っていく必要がある。当分野では、地域に存在する幅広い課題を捉え、学生が自らの視点を活かし、課題の解決に向けて意欲的に挑戦する研究を指導していきたいと考えている。

取り上げるテーマは、経済・産業など大きなものから、個別企業、商品、祭りやイベントなど地域文化に至るまで多様であり、それをどのように考え、構築し、展開していくかについても多様な視点が要求される。学生自身の今までの学習の集大成として、自由でかつ大胆な視点から、また地域課題の縮図として、それを広く応用できるように緻密な調査・分析によって、まとめていって欲しいと考えている。

この分野を希望する学生数が多いことに加え、取り上げるテーマが多様であることから、十分な指導を行うためには、早い段階からテーマを決め、資料収集、調査などを計画的に進めて行く必要がある。指導教員から十分な指導を受けるためにも、意欲的に教員に働きかけ、取り組んでいく姿勢を示して欲しい。構想発表会などの予定は、積極的にかつ早めに進め、成果が十分得られるように進める。なお各テーマについて意見が必要な場合は、直接担当教員に問い合わせいただきたい。

### 推奨論文

1. 「宮城県仙台市における子ども食堂の現状と今後の展望」(松崎美保、2018年3月卒業)
2. 「青森県八戸市における銭湯利用の変化と観光資源化への取り組み」  
(畠山友花、2016年3月卒業)
3. 「避難指示解除後の仮設住宅入居者の帰還意識とまちづくり計画の関連性  
～福島県浪江町笹谷東部応急仮設住宅を例に～」(野地絃太、2016年3月卒業)
4. 「歴史的な街並みを活かしたまちづくりの実態と今後の展望  
—横手市増田重要店頭の建造物群保存地区を事例に一」(天童沙紀、2016年3月卒業)

## 22. 地域コミュニティの創造力と回復力

金菱 清☆ 佐久間 政広

本チームでは、社会学的アプローチをもとに地域社会が大小様々な問題を解決する力や過程を考察する。各フィールドを生活世界とする人びとが問題に向き合うとき、彼ら彼女らは市町村や県、国といった遠くて大きな公的組織にいきなり頼るのではなく、かならず身近にある地縁や

ソーシャルネットワークが集積した「自前」のローカルな装置や制度を駆使したり利用したりする。フィールドワークを繰り返すことを通して、そのようなローカルな装置や制度に肉薄し、生活するうえで避けては通れない課題を解決する仕組みや、そこに織り込まれている人びとの願い（幸福度）を見出すことに挑戦してみる。さまざまな事例が想定されうるが、たとえばわれわれが身近に直面した東日本大震災では、凶体の大きな国に全面的に頼ることなく、自助・共助によって制度を補うようなセイフティーネットが各地で培われた。このような地域コミュニティの創造性に着目することで、大災害という未曾有の場面に立った時にも、危機を転換／危機から回復できる智慧を私たちは学ぶことができる。そこに住んでいる人びとが今ここにある地域社会そのものを、どのように再生産しようとしているのかを考えることで、自分たちの生き方に関わるひとつのヒントを手繰り寄せることになる。

#### 推薦論文

「幽霊の語られないまち—社会が判断する身内の死」(赤間由佳、2017年度)

「原発事故によって失われた地域の継承—牛の慰霊碑建立をめぐる」(石橋孝郁、2017年度)

「ふるさと納税制度は地域格差の是正に役立っているか」(市川歩、2017年度)

「隣接地域の被災地支援における公助と共助の区別と連関

—岩手県遠野市と宮城県登米市鱒淵地区の事例」(小野寺翔、2016)

## 23. 地域のまとまりとゆらぎ

高野 岳彦☆ 遠藤 尚

人間が生きるということは身の回りの空間に自分なりの意味を与えることであるということに諸君は気づくだろうか。空間に与えられる意味は、一定の環境のもとで暮らす地縁集団にとっては集団の意味に転化し、それらは一定の「まとまり」をもった景観を生み出す。「地域」はこうして生まれる。それぞれの地域で、人々は自然や社会とのかかわりの中で様々な生活の知恵や人間関係、価値観を継承したり再構築したりしている。個性豊かな地域の景観はその結果でもある。

しかし、地域は閉じた空間ではない。人や物が内外を相互に移動することで地域は成立している。また、現代の地域は、人口減少、高齢化、自然災害、そしてグローバル化の影響など、多くの不安定要素に満ちており、地域は日々変動する「ゆらぎ」の中にある。それは日本だけの現象でなく、ほかの国々でも変わらない。

私たちのチームでは、こうした「地域」をめぐる「まとまり」と「ゆらぎ」の諸相について、担当者の専門分野である産業地域論、地域文化論、人文地理学を基礎としつつ、グローバルな視点も取り入れ、関連分野との交流も図りながら、文献調査、現地踏査、統計分析、質問紙調査、分布図づくりなど地域研究の諸手法を駆使して、とらえたいと考えている。

#### 推奨研究

「機織技能の伝承保存活動をめぐる伝統文化観の変質—小野田地織」(佐々木汐音、2010)

- 「万石浦の漁場利用システムと種ガキ生産」(小野寺朋美、2016)  
「桑折町における住民主体のまちづくりの取り組みと課題」(久保貴義、2017)  
「阿武隈山村山舟生の多様な食資源とその担い手」(山田佳奈、2017)  
「郊外住宅団地の高齢化・商業空洞化と買い物弱者解消の取り組み」(村山花奈、2018)

## 24. 少子・高齢社会と福祉

菅原 真枝☆ 大澤 史伸 増子 正

少子・高齢化の進展に伴い、わが国の社会福祉は転換期に直面している。「福祉」という言葉から、生活困窮者や障がい者、介護が必要な高齢者に対する支援を思い浮かべるかもしれないが、現代社会における福祉課題はこれにとどまるものではない。地域社会に目を転じてみれば、人間関係の希薄化や地域活動への参加の機会の減少により、子育てに不安を感じたり、高齢者の単独世帯の増加に伴う災害時の要援護者支援も急務である。障がいの有無に関わらず、世代を超えてすべての人がよりよい地域生活を営むための社会全体の福祉のあり方を考え直さなければならない。

福祉は、社会政策によってのみ支えられているのではなく、家族や地域、企業、NPOなどの市民団体、ボランティアなど様々な社会資源によって支えられており、これらインフォーマルな活動が地域の福祉の重要な部分を担っていることを認識しなければならない。福祉をわれわれの地域生活と密接に結びつけたものとして捉え、総合的な視点からアプローチすることが求められている。本チームでは、地域社会が抱える福祉課題について文献や資料から考察したり、実際のフィールドでの調査活動や具体的事例の分析を行う。

### 推奨論文

- 「地域通貨はコミュニティ形成に貢献できるか  
—宮城県仙台市泉区永和台の地域通貨『かまど』の事例を通して」(白石淳弥、2008)  
「仙台市の待機児童の増加と原因」(菅原葵、2009)  
「地域防災活動における民生委員の役割」(酒井優、2011)  
「地域医療及び地域の福祉におけるドラッグストアの役割」(熊谷直人、2013)  
「東日本大震災から4年後の心のケアの現状把握  
—NPOを通して心のケアを可能にする方法—」(小松準弥、2016)  
「みやぎ生協ボランティアセンターの抱える課題と対応の現状」(鈴木雄太、2016)  
「宮城県の介護施設における介護ロボット導入の現状」(千崎吏稀、2017)

## 25. 健康とスポーツの科学

天野 和彦☆ 松原 悟

「スポーツ」とは、固定化されたものではなく、時代、場所、歴史などにより、流動的に変動する文化の事です。特に、最近では、政治性や経済的基盤により公共の施設が民営化されており、地域で活躍するスポーツにはスポーツを通じて健康の維持増進や教育といった社会的な役割を担うことが期待されています。「健康とスポーツの科学」チームでは、受講生一人ひとりが地域で活躍できるような人材を教育することを目標としています。

「健康とスポーツの科学」チームでは、上記の目標を達成するために、スポーツ活動が人々の健康に与える効果を科学的に検証するための分析方法、スポーツ活動を運営するためのマネジメント、スポーツ指導方法を実習により習得していきます。また、習得した方法を用いて活動した結果を卒業研究としてまとめる作業を通じて、受講生の論理性もトレーニングします。

具体的には、①科学的なスポーツコーチング、②中高齢者の健康と運動処方、③スポーツ生理・心理学的研究、④プロスポーツと地域社会、⑤住民参加型のスポーツクラブ・イベントのマネジメントをテーマとして（①を松原、②と③を高橋、④と⑤を天野がそれぞれ担当）、総合研究を行っています。

### 推奨論文

「運動教室U-chと多賀城市民スポーツクラブの成果比較：血液・形態に着目して」

(遠藤朱美、2010)

「学生生活における満足度と課外活動との関係についての研究」(中村純子、2016)

※高橋信二先生は、平成30年度後期（卒業研究B）及び平成31年度前期（卒業研究A）は担当されません。

## 26. 情報技術と社会

鈴木 努☆ 伊藤 則之 乙藤 岳志 杉浦 茂樹

現在の私たちの生活は様々な情報技術の恩恵を受けて成立している。コンピュータ、スマートフォン、インターネット、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）といった情報技術は日常生活の一部であるとともに、学術研究の重要な基盤となっている。

「情報技術と社会」チームでは、これらの情報技術と社会との関わり方を人間科学と情報科学の両面から考えていく。人々の意識や行動は情報技術の進歩によってどのような影響を受けているのか、社会においてどのような情報技術が求められているのか、またそれを実現し人々の活動を支援していくためにどのような情報技術が可能なのか、各教員の専門分野をベースにしつつ、さらに幅広い視野から研究を進めていく。

伊藤は情報科学とくにソフトウェア開発の視点から、人間の社会活動を支援する情報技術の実現とその効果を見てゆく。特に、SNSに関連するスマートフォン用アプリケーションの開発技術、またそのアプリケーションの使いやすさや利用形態について、実際のアプリケーションを開発し、適用することにより評価・分析を行う。

乙藤はネットワーク技術、ネットワーク社会と人間、社会との関わりを見ていく。クラウド環境とスマートフォンのネットワーク、ネットワークにおける、脆弱性からの保護など、使う人の裏側にある、技術的、社会的課題を解決する研究を行う。

杉浦は情報科学とくにコンピュータシステム構築の視点から、情報技術と人間や社会との関わりを見ていく。例えば、KinectやLeap Motionなどのナチュラルユーザインタフェースを活用したシステムの開発と評価、高齢者や障害者を支援するシステムの開発と評価、サーバのログ解析によるネットワークセキュリティの考察などの研究を行う。

鈴木は人間科学とくに社会学の視点から、人々の情報行動の分析を行う。例えば、SNSにおける人間関係のネットワーク分析やテキストマイニング、情報可視化のためのWebアプリ作成などを行う。

### 推薦論文

「視覚と聴覚の同時処理能力を高める訓練支援アプリケーションの開発」(佐藤友朗、2017)

「軽度認知症とMCIの服薬を支援するAndroidアプリ」(甘野開流、2017)

「企業イメージとTwitter広告がユーザーの製品に対するエンゲージメントに与える影響」

(澤谷兼・熊谷美悠・佐藤いぶき・佐藤若菜、2017)

## 27. 情報活用による地域社会の課題解決

坂本 泰伸☆ 和田 正春

本総合研究では、産業、生活、地域コミュニティなどの多様なフィールドに潜在する「地域の課題」を、「情報技術の活用」などを通じて実践的手法によって解決していくことをテーマとする。地域の課題解決には、問題の把握、調査・分析、解決策の構想など、幅広い取り組みが求められるが、ここに情報技術の活用を積極的に図ることで、問題の明確化や解決をより促進することが期待できると考える。

研究は地域の課題解決と情報技術に関する学習をしながら、受講生の意思を尊重し、テーマやフィールド、個人やチームなどを決定して進めていく。また受講者には、領域横断的な取り組みを推奨するが、一つの領域に特化した研究を行うことも可能である。実効性のある成果を意識した取り組みを期待する。

### 推奨論文

「一ノ蔵と瀬祭の比較 地方中小企業の生き残り戦略」(佐藤由佳・小田島愛、2018)

「過疎集落における祭りの実態と展望 大鰐町ねふた運行を例に」(阿保里奈、2017)

「指定管理者制度導入の実態 吉野作造記念館を事例に」(我妻朋美、2016)

「VRを用いた入院児童向けストレス軽減プロトタイプシステムの

画像視聴アプリケーションの開発」(秋元 錬、2018)

「高齢者の孤立防止活動に対する写真印刷システムの導入と評価」(若林実歩、2017)

「可視化したキーワードをもとに文献資料の探索を支援するwebシステムの開発」

(遠藤ゆう太、2016)